

# ヤシの葉写本研究ノート

安江明夫

## はじめに

ヤシの葉写本 (palm leaf manuscript) は、日本では通常、貝多羅 (あるいは「貝多羅葉」、短縮して「貝葉」) 写本と呼ばれる。ヤシの葉は、世界文化史上、パピルス、パーチメント (獣皮)、紙等と並ぶ重要な書写支持体<sup>1)</sup> (writing support、以下「支持体」と記す。) である。しかし欧米でも日本でも必ずしもそのようには認識されていない。日本では制作されず身近でない支持体なので止むを得ないとも考えるが、しかしその点では事情が同様のパピルス、パーチメントに比しても理解が浅い。

ヤシの葉写本は古代インドに端を発し、アジアの広い地域で制作された。時代・地域によっては最も重要な文書遺産を構成する。日本でも重要文化財指定のヤシの葉写本 (仏典) があるように文化史上も意義深く、かつ国内で同写本を所蔵している図書館・アーカイブズ、寺院等も少なくない。にもかかわらず理解、関心が仏教関係者、アジア研究者の一部にとどまっているのが現状である。

筆者は図書館・アーカイブズの資料保存を専攻する者で、アジア諸国の文書遺産保存も課題の1つである<sup>2)</sup>。そのためヤシの葉写本の歴史事情、写本学的特性、物理的性質、保存方法等を理解することが必要であった。

関連の文献は少なくないので参考にさせていただいたが、しかしそこに示される見解がしばしば論者により喰い違い、不明な点も残った。それゆえに進めた調査と考察を、今後はヤシの葉写本の特性と歴史を中心に整理し、小稿とする。

ヤシの葉写本の歴史については未明の点が多く、推論を記すことが幾多となった。その点、読者諸賢のご寛容とご批正をお願いしたい。また本稿執筆にあたって国内外の先達の研究成果を読ませていただいたが、とりわけ小西正捷（立教大学名誉教授・インド学）、三保忠夫（神戸女子大学教授・国語学）、阿部登（ヤシ研究者・故人）の3氏の著作から多々、貴重な教示を得た。記して格別の謝意を表したい。

## 1 ヤシの葉写本の特徴

### 1.1 支持体としてのヤシの葉

ヤシは主として熱帯地域に分布し、ヤシ科に属する植物は世界で3000種以上に達する。私どもの近辺で見られるシュロやビロウもその仲間、ココナツを産出するココヤシも良く知られる。この多種のヤシのなかで支持体に用い得るものは、葉の構造・形態上から10余種程度といい、実際の使用種はさらに少ない<sup>3)</sup>。

アジアのヤシの葉写本は古代インドを源とし、南アジア、東南アジアで広く制作されたが、そこで使用された代表的ヤシはまず次の2種である。

- ・パルミラヤシ（別名：オオギヤシ、ウチワヤシ、学名：Borassus flabellifer）

- ・コリハヤシ（別名：タリポットヤシ、学名：Corypha umbraculifera）

パルミラヤシは北アフリカ原産で、インドには紀元前の早い時期に移植されたという。食材（でんぷん、砂糖、酒材料）、建材、船材、生活工芸材（駕籠、箒、帽子、網、敷物）などと用途が広く、重要な産業植物の1つである。インドではヒマラヤ山麓の最北部および北西部<sup>4)</sup>を除く広い

地帯に分布する。スリランカ、ネパール、東南アジア一帯（ただしフィリピン及び北部ベトナムを除く）、中国最南部にも生育する<sup>5)</sup>。北方限界は北緯30度<sup>6)</sup>とされる。

コリハヤシは南アジア（インド南部、スリランカ）原産である。屋根萱材などに使用されるほかは用途が少ないが、写本の材料としてその葉は柔軟性、耐久性に優れ、品質が良い。また葉が大きいのでその分、面積の大きいシートを得ることができる。標高600m以下の主として沿岸湿潤地帯に生育する。

上記の代表2種に次ぐ支持体ヤシは以下の4種である。

- ・タリエラヤシ（別名：ベンガルコリハヤシ、学名：Corypha taliera）
- ・タラバヤシ（別名：グバンヤシ、ロンタルヤシ<sup>7)</sup>、学名：Corypha elata または Corypha utan）
- ・ニッパヤシ（学名：Nypa fruticans）
- ・コリハ・レコンティ（学名：Corypha lecomtei）

タリエラヤシはベンガル地方の原産でコリハヤシ同様の高木である。現在は絶滅危機品種に数えられている。分布からみると使用はほぼインドに限られる。

タラバヤシはインドのほかインドネシア、ミャンマー、マレーシア等に分布し、パルミラヤシと同様に食材、生活工芸材としても用いられる。分布する地帯全般で支持体として利用されている。葉に柔軟性がありかつ大きめのシートを得られる点で、支持体としてコリハヤシに近い良い特性を有する。

ニッパヤシはパルミラヤシに似るが葉が小型である。インドネシアで支持体として多く用いられた。

コリハ・レコンティはタイ、中国、ベトナム、カンボジア、ラオスに分布する。タイのヤシの葉写本の多くはコリハ・レコンティの葉とされる<sup>8)</sup>。同種もコリハヤシに類似するが葉の柔軟性はやや少なく、また上下辺が蒲鉾型に少し湾曲する。（但しこの特徴は調製法の違いに起因するかも知れ

ない。)

上記ヤシ6種のほか砂糖ヤシ (*Arnga pinnata*)、ココヤシ (*Cocos nucifera*)、ナツメヤシ (*Phoenix dactylifera*) 等の葉が支持体として使用された報告がある<sup>9)</sup>。これらはしかし地域、用途（メモ用など）、使用量が限定的だったと推測する<sup>10)</sup>。ナツメヤシについては再述する。

## 1.2 調製方法、書写方法、写本形態等

次にヤシの葉の調製方法、書写方法、写本形態を概観しておこう。

### 調整方法

まずヤシの葉の調整方法を紹介する。但しここで示すのは基本で、地域、時代、ヤシの種類により調整方法には変異がある。

最初にヤシの幼葉（発芽から成長4～5週間後）を切り出し、葉中央の主脈（リブ）を取り除く。そうしてできた細長い葉を、次いで乾燥させる。この過程で、水・ミルク・米とぎ汁等中で煮沸あるいは蒸す、濡れた砂・湿った干し草中に埋めるなどの方法を加えることが多い。その後、乾燥したヤシの葉を長方形（短冊状）に裁断し、プレスする。続いて石や砂、貝などで磨き、最後に布で拭く。石、貝などで磨くのは滑らかで光沢のある表面に仕立てるためである<sup>11)</sup>。

Parchment・紙に比べれば、比較的簡単、廉価に調整できる利点を有する。

### 書写方法

ヤシの葉への書写方法は、次の2つである。

- (1) ペン・筆を道具にインクで書写する方法（以下、「ペン書き法」と記す。）
- (2) 鉄製などの尖筆で線刻する方法（以下、「線刻法」と記す。）

上記(1)は葦・竹製のペンあるいは筆と煤・油などで精製する顔料イ

シクを用いる書写方法である。

上記（2）は細分すると、線刻のみの方法、線刻後に煤などを擦り込む方法、の2種に分かれる。パルミラヤシの場合、線刻箇所は酸化酵素により少し黒ずみ、そのままでも一定程度、字が読めるようになる。しかし書写した文字を鮮明にするために、一般的には線刻箇所に煤・炭粉を擦り込む、あるいは煤・炭粉と油を混ぜたものを表面に塗布し、その後、葉の表面を拭う方法を採用する。線刻した箇所に顔料を残すのである。コリハヤシの場合は葉の酸化酵素が働かないので煤・炭粉の擦込みが必要だが、それでもときに線刻のみの写本も見られる。

ところで2種の書写方法が2種のヤシの葉と結びついていると説く人が少なくない。即ちヤシの葉の性質上の違いから、コリハヤシにはペン書き法、パルミラヤシには線刻法を採用したとする説である。例えばGraham Shaw（英国図書館）は「コリハヤシは葦ペンをういインクで書かれたが、パルミラヤシはインクを十分には吸わない。それで（パルミラヤシの場合は）テキストは鉄筆で線刻された後、溝にインクを擦り込んだ」<sup>12)</sup>としている。しかしこの指摘は正しくない。

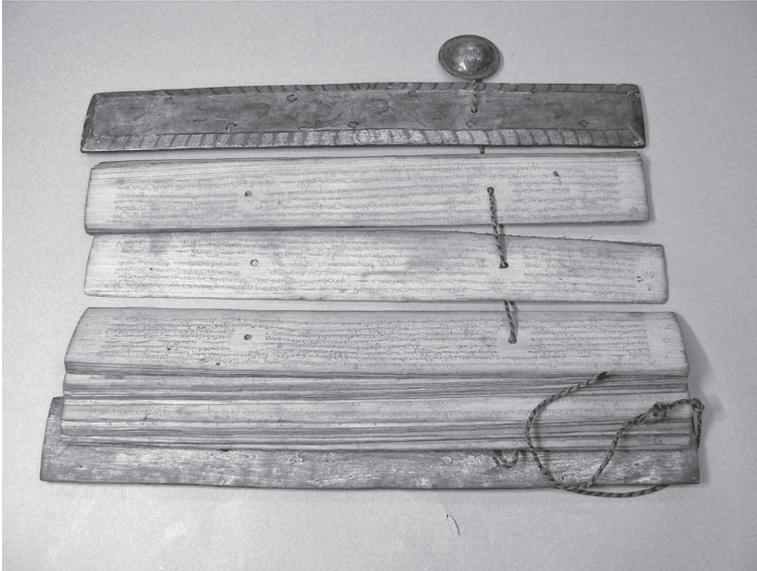
確かに一般的には、北インドではコリハヤシの葉にペン書きが主流で、一方南インド、東インドではパルミラヤシの葉に線刻が主流と言えるだろう。またパルミラヤシの葉は油分が多くインクを受け付けにくい。しかしインクのノリの課題はヤシの葉調製の工夫、調整後の経過時間等で解消したはずである<sup>13)</sup>。現にネパールではコリハヤシの葉とともにパルミラヤシの葉を使用した<sup>14)</sup>が、そこでは双方のヤシの葉にペン書き法で書記している<sup>14)</sup>。一方、スリランカ、ミャンマー等ではコリハヤシ、パルミラヤシの双方の葉を使用した<sup>14)</sup>が、そこでは線刻法を採用した。つまり書写方法はヤシの葉の種類と直接に結びつかない。

## 写本の形態

ヤシの葉写本の一般的形態は、短冊状のシートを重ね、その上下に木

（または竹）の板（「夾板」）をあて、ヤシの葉と夾板の両方の中央に孔を1つあるいは2つ、時には3つ開け、夾板とシートの孔に紐に通す。（写真1参照）それによりシートの秩序、写本の形態を維持する。この形態はインドではポーティ（pothi）様式と呼ばれる。日本では貝葉装あるいは梵挟装と言う。

写真1 ヤシの葉写本例（スリランカ經典、1773年）



国立民族学博物館所蔵／筆者撮影

上記の形態の場合、ヤシの葉の両面に書写するのが普通である。ヤシの葉を重ねた一番上が第1葉で、その表から裏へと書き進み、次葉の表面へと移る。ある葉の裏と次葉の表が絵と文などで対をなす写本も見られる。書誌的には写本一束ねを「束 (bundle)」、一束を「葉 (leaves または folios)」数で示す。葉の表面の端にページ付けに該当する序数が記される場合もある。

ヤシの葉写本のポーティ様式は、他の支持体—銅板、樹皮のちには紙など—にもしばしば踏襲された。これはヤシの葉写本の伝統性、権威性を示

すものと理解されている。

ヤシの葉写本の形態はポーティ様式が一般的だが、そのほかりボンのように巻く様式、長方形の葉を折り畳む様式、複数の葉の長辺を糸で繋ぐ様式（折本の体裁）もある。

## 2 ヤシの葉写本の起源

### 2.1 インドでの始原

アジアでのヤシの葉写本はインドが源とされるが、ではヤシの葉はいつ頃からインドで支持体として使用されたか。

現存するヤシの葉写本で最古とされるのは、中央アジアで発見された推定 AD 2 世紀頃の写本断簡である。また AD 4～5 世紀の断簡がやはり中央アジアで発掘されている<sup>15)</sup>。日本に奈良時代に請来し現在も寺院等で保存されているもの、ネパールで保存されているものがそれに次ぐ。熱帯・亜熱帯の気候のせい、インドでは AD 11 世紀以前のヤシの葉写本は発見されていない。

しかしインド写本の研究者ゲオルグ・ビューラー（ドイツ）は、AD 1 世紀以前の銅板写本にポーティ様式が見られることから「ヤシの葉写本がそれ以前に存在していたことは確実」<sup>16)</sup>としている。

また記録類の調査からは、例えば、BC 1 世紀、スリランカで仏典編集が行われたが、諸々の事情を考慮すれば経典支持体はヤシの葉をおいてなく、その頃にはインド亜大陸に南接するスリランカにヤシの葉書写方法が伝わっていたとされている。山崎元一（古代インド史研究者）は「それまで口承によって伝えてきたパーリ語の経典を棕櫚の葉つまり貝葉に書写した。これが仏教史上における最初の経典筆写事業である」<sup>17)</sup>と概説し、それが BC 1 世紀のことと記している。

BC 1 世紀には既にヤシの葉が支持体として使用されていた。そう認めたとして、では始原はどこまで遡るだろうか。言い換えれば、インドで最

初にヤシの葉が支持体として使われたのはいつ頃だろうか。

それに直接に応えうる記録・資料はない。しかしヤシの葉写本の始原はBC 1世紀を幾世紀かは遡るのではないか。間接的な方法で推測を重ね筆者はそう考えるが、その理由を以下に示したい。

少し迂回することになるが、まずインドにおける文字の誕生を考えてみよう。支持体は文字がなければ用をなさず、逆に文字は支持体（例えそれが金石、木片、陶片、貝殻などであれ）なしでは表示できないからである。

インドにおける文字の歴史を概観すると、古代インダス文明の印章文字に関する議論は別として、セム系のアラム文字に起源するカローシュティー文字が誕生し、別のセム系文字からブラーフミー文字が派生したと言われている<sup>18)</sup>。その時期は論者によりBC 8世紀からBC 3世紀と推定に幅があるが、カローシュティー文字、ブラーフミー文字ともにBC 6～5世紀頃とする説が一般的である<sup>19)</sup>。カローシュティー文字とブラーフミー文字の使用地域、開始時期については再述することにして、筆者もBC 6～5世紀頃にインドで文字が使用され始めたとする説を念頭に議論を進めたい。釈尊が仏教を開いたのはBC 5世紀頃とされるが、釈尊自身は文字を知っていたこと、また仏教記録には往時、書記生が居たこと、公私の写本があったことなどが記されている。BC 5世紀頃にはインドで、ある程度、文字が普及していたと見てよいのではないか<sup>20)</sup>。

カローシュティー文字はBC 2世紀頃までインド北西部で使用されたが、後、勢いを増してきたブラーフミー文字に替わられた。一方、ブラーフミー文字からは多くのインド文字が枝分かれして生まれ現在に至っている。ではカローシュティー文字、ブラーフミー文字が使用された初期、それらは何に記されたのだろうか。

石柱や建造物などへの記念碑刻印があるが、それだけでなく交易や行政上の必要で、あるいは公私の書簡等においてインド人は文字を用いた。とすれば金石などとは別に、簡便で携帯可能な支持体が必要であったに相違ない。インド写本学者の記すヤシの葉、樹皮、綿布などはもうその頃

（BC 5 世紀頃）から使用されたのではないだろうか<sup>21)</sup>。

BC 4 世紀、アレクサンドロス東征の海将としてインドに赴いたネアルコスの記録が他のギリシャ・ローマの著述家によって伝わっている。それらは「（インドでは樹皮の内皮が支持体として用いられそれは）柔軟でパピルスのように書写しやすい」<sup>22)</sup>（クルチウス）、あるいは「この著者（ネアルコスのこと一筆者）はひじょうに堅地に織りあげた薄手の布に書状を認めるとも述べている」<sup>23)</sup>（ストラボン）としている。ネアルコスが訪れたのはインダス河流域のインド北西部である。インド北西部では支持体ヤシを産せず、主として白樺樹皮あるいは綿布を支持体として使用した。それをネアルコスが認め記録している。彼がインドの他の地域—例えば南インド—を訪れていれば、そこではヤシの葉支持体を観察することになったのではないか。

## 2.2 源流遡行

ひとまずヤシの葉が BC 5 世紀頃、文字使用とともにインドで支持体として用いられ始めたかと仮置きして、ではヤシの葉使用はどのようにして誕生したか。布、樹皮、金属板とは異なる支持体であり、かつ書写方法にも独自性が見られるので、そこに問いが生ずる。この点に言及している論稿は僅かだが、考察を進めてみよう。

一般に文字が伝播するとき、書写方法・書写材料も一緒に伝播するのではないだろうか。中国の漢字が朝鮮、ベトナム、日本等に伝播したとき、同時に簡牘、布、紙そして墨・筆・硯などが伝播した。漢字文化圏は同時に手漉き紙・墨硯・毛筆文化圏を形成したが、これは文字と支持体、書写方法との一体関係を示す良い例である。そう考えて、ヤシの葉支持体のアジア起源に別の視点からアプローチしてみる。

最初にプリニウスの『博物誌』を見る。プリニウスは AD 1 世紀のローマの賢人で、著書『博物誌』が古代の地誌、自然史の貴重な宝庫であることは良く知られている。同書にはパピルスの発明や製法、パーチメント、

蠟板の使用なども記されるが、そのパピルスについて記す件で次のように述べている。「(前略) 紙（パピルスのこと—筆者）もアレクサンドロスが勝利をおさめてエジプトにアレクサンドリアを創設したときに世に知られたもので、それ以前には紙は使用されなかった。最初はヤシの葉にもものを書く習慣であったが、ついである種の樹木の皮を用い、その後、公の写本には鉛製折本、私的な写本には亜麻布や蠟板を用いるようになった。」<sup>24)</sup>

現存する最古パピルスとして BC 30 世紀のものがあり、プリニウスがパピルスの使用をアレクサンドロス（BC 4 世紀）以来としているのは正しくない。その点を『博物誌』邦訳者は、注で「(パピルスの) 使用や売買が大いに広まったのは、アレクサンドロス大王がエジプトにアレクサンドリアを創設してから以降のようである」<sup>25)</sup> と補足している。つまりこういうことであろうか。パピルスは BC 30 世紀の昔から使用されたが、一般に広く普及するのは BC 4 世紀頃からである。BC 4 世紀以前にはパピルスとともにヤシの葉、樹皮、鉛版、亜麻布、書板（wooden tablet）<sup>26)</sup>、蠟板（wax tablet）などが使用された。ヤシの葉や樹皮は最も古い時代から使用され、他の支持体（パピルスやパーチメント）が普及してきて、次第にそれらにとって替わられるようになった。

とって替わられたと記したが、広大な地理的・文化的空間においては新しい支持体が現れると従来の支持体が簡単に消えるようには交替しない。プリニウス自身、『博物誌』のなかで、樹皮が『博物誌』執筆時も兵士が上官に報告する際などに使用されると記している<sup>27)</sup>。AD 1～3 世紀のものとして古代ローマ時代のヴィドラング遺跡（ブリテン島）から大量の木板写本が発見された事例もある。これらは、パピルスやパーチメントが入手しにくい所では、あるいはより簡便に用を足す場合などには、紀元後もパピルス、パーチメント以外の支持体も使用されたことを示すものである。

プリニウスの記述に重なるが、イスラム社会でヤシの葉支持体が広く使用された。佐藤次高（イスラム研究者）は「紙が普及する以前のイスラム世界についてみると、重要な事柄は、エジプトを中心とする地域ではパピ

ルスや亜麻布、そのほかの地域では羊皮紙（パーチメント）や子牛皮（ヴェラム）に記された。また樹皮、木や石の板、あるいは椰子の葉なども、より安価な書写材料として広い地域で用いられていた」<sup>28)</sup>と述べている。ヤシの葉に記された記録（メモ）を元にコーラン（クルアーン）が編集されたことも良く知られている。小杉泰（イスラム研究者）は、マホメットに仕える書記達によって「クルアーンの相当部分が書き記されていたことは、ほぼ間違いない。（中略）素材は、獣皮紙（羊皮紙・鹿皮紙など）、ヤシの葉、薄い石片、動物の骨など多様なものだった」<sup>29)</sup>と記している。また「コーランは古代、ヤシの葉支持体に書かれた。マホメットの死後、（中略）ゼイト・エブントベットにコーランの言葉を収集するよう指示した。ゼイトは『私はナツメヤシとそれを知る者から収集を始める』と述べた」<sup>30)</sup>とヤシの葉がマホメットの言葉の記録支持体の主流と示すものもある。ここでは素材のヤシの葉をナツメヤシと特定している点にも注目しておきたい。イスラム世界では紙使用が普及する8世紀まで、パピルス、パーチメント等とともにヤシの葉が使用された。

このように地中海・オリエント世界でヤシの葉が支持体として使用されたことは、インドの支持体を研究する者にとっては重要である。というのも周知のように、インドと地中海・オリエント世界は、古代より政治的、経済的、文化的に密接な交流を重ねてきたからである。ダレイオス一世（BC 5世紀）、アレクサンドロス（BC 4世紀）のインド（西北部）に及ぶ版図拡大もその延長にある。地中海世界からインドにまたがるペルシャ帝国やアレクサンドロス大王領は、広範な交流を生み出しもした。ギリシャ彫刻のガンダーラ芸術への影響、インド哲学のギリシャ哲学への影響などはその文化的現れの例である。

上記のような政治的、経済的、文化的な交流のなかにおいて、セム系文字の影響を受けてブラーフミー文字が誕生し、また他方、ペルシャとの文化交流のなかからカロシュティー文字が誕生した。そしてインドが地中海・オリエント世界の影響を受けて文字使用を始めたとき、文字とともに

支持体も一緒に受容したのではなかったか。地中海・オリエント世界の書写方法と支持体素材から、インドの人々は風土に合わせて取捨選択し独自の書写文化を発展させたと推測する。

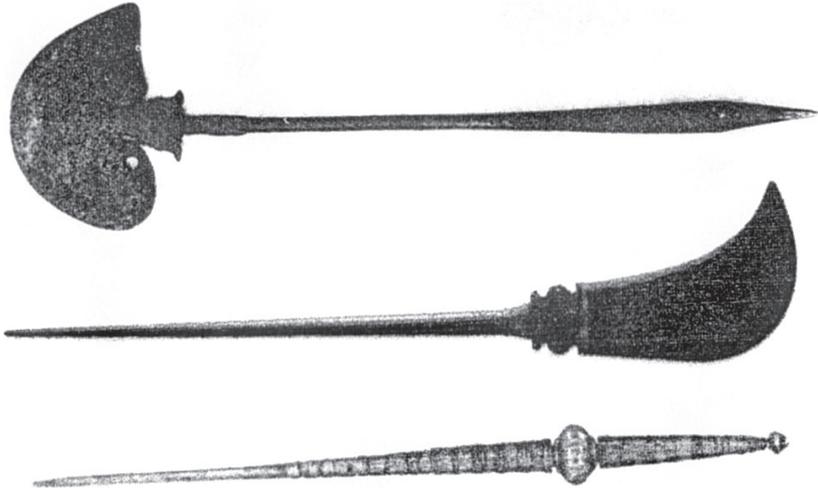
プリニウスが記す種々の携帯支持体のうちインドで受容し難いものは、ナイル河流域にはぼ限定製造のパピルス、暑熱に不適な蠟板、動物愛護／宗教的理由からのパーチメントである。逆から見るとパピルス、蠟板、パーチメント以外の古代地中海・オリエント世界の支持体であるヤシの葉、樹皮、書板<sup>31)</sup>、金属板、布はすべてインドで使用されている。これは偶然の一致だろうか。おそらくそうではない。インドでヤシの葉、樹皮、銅版、布などが支持体として用いられたことに、地中海・オリエント世界の影響を見ることができるのではないか。

この点、特にヤシの葉に関して言語的に以下が示されている。パルミラヤシはサンスクリット語で *tala*（あるいは *tale*）と呼ばれるが、同語はバビロニア語に由来しナツメヤシのことだと言う<sup>32)</sup>。これはインドにおけるヤシの由来に関係すると見ることもできるが、あるいは支持体ヤシの由来を示唆しているのかも知れない。なぜならナツメヤシ自体はインダス河流域などに限定されるとは言えインドに分布し、かつ野生種（学名：*Phoenix sylvestris*）が自生する。新たな名称を必要としたとは考えにくい。かつ *tala* をインドではナツメヤシではなくパルミラヤシに冠した。支持体ヤシが地中海・オリエントからインドに伝播したとき、支持体となるヤシの意味で *tala* を用いたのではないか。それで使用する支持体がインドでナツメヤシからパルミラヤシとなった際に、パルミラヤシを *tala* と称した。インドではパルミラヤシそして（おそらく次いで）コリハヤシ（サンスクリット語で *sri-tala* あるいは *tali*）の葉を支持体として採用したからである。語の由来時期が不明であり確たることは言えないが、以上は作業仮説として記しておく。

地中海・オリエント文明の影響の存否を探るために、もう1点、ヤシの葉書写に使用する尖筆を考察してみよう。

前述のとおりヤシの葉書写にはペン書き法でなければ線刻法を採用した  
が、線刻法の場合、主として金属製尖筆を道具とした。（ほかに竹製、角  
製もある。）尖筆の形は多様だが、代表的形状に写真2の上2本のように  
尖筆頭部（head）が平なものがある。

写真2 ヤシの葉書写用尖筆<sup>33)</sup>



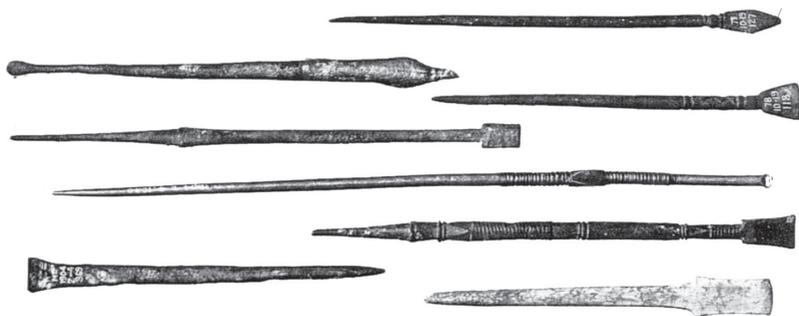
ところで大英博物館でヤシの葉書写用尖筆の展示をみた三保忠夫（国語  
学者・ヤシの葉写本研究）は次のように記している。「大英博物館に  
は）一本の鉄筆 Iron Stylus が展示されている。頭部は平たい fan 状を呈  
しており、これは書く時にバランスをとり、かつ、ミステークをこすり落  
とすためのものと説明されている。19世紀、東インドのオリッサで用い  
られていたものとされるが、こうした鉄筆が、はたして、Palm leaf に用  
いられたかどうかの点については、なお、検討の余地があろう。」<sup>34)</sup> イ  
ンド東部のオリッサはヤシの葉写本制作の拠点の1つで、現在もヤシの葉  
写本あるいは工芸品を産している。そこでは確かに「頭部の平たい鉄筆」  
もヤシの葉写本制作に用いられた<sup>35)</sup>。その点で三保の疑問は当を得ない。  
しかし展示解説が不正確で、三保の疑問はそこから生じたのではないかと

推測する。ヤシの葉の場合、書き損じが生じても尖筆頭部で「ミステークをこすり落とす」ことはしない。

尖筆頭部で書き損じを直すのは、ヤシの葉ではなく地中海・オリエント世界で広く使用された蠟板の場合である。蠟板の歴史は極めて古く、BC 14 世紀の蠟板がウル・ブルン（Uru Burun、現トルコ南部沖合）で発掘の難破船から発見され<sup>36</sup>、ニネヴェの宮殿遺跡（古代アッシリア、BC 7 世紀）では大量の蠟板が発掘されている<sup>37</sup>。ギリシャの画家ドゥリス作の赤絵式壺（BC 480 年頃）に蠟板・尖筆が克明に描かれている例もある。

蠟板は葉書大の木版をくり抜いてそこに蠟を流し込み、固まった蠟に金属製の尖筆で書写する支持体である。書写の際に書き損じると、該当箇所（蠟）を尖筆頭部で削り落とす。ときには尖筆頭部を熱し、それで蠟を溶かしながら字面を平にする。そのため、尖筆頭がヘラのように平になっているものが多い。（写真3参照）

写真3 蠟板用尖筆<sup>38</sup>



そこで写真2と3を見比べるのだが、そこからヤシの葉に書写するに際し蠟板用尖筆を転用したのではないか、の想像に誘われる。蠟板書写の道具を用いてヤシの葉に線刻する方式を編み出したのではないか。それで尖筆の形は蠟板用のものを踏襲した。ヤシの葉書写には役目のない尖筆頭部の裝飾性を帯びた平たい形はその名残と言えないか。

ではオリエント世界でナツメヤシの葉を支持体として用いた人びとは、どのような書写方法を採用したのだったろうか。やはりペン書き法だったか。線刻法を用いることはなかったか。あるいはそれともその両用だったか。

もしアラブ人などが蠟板用尖筆をヤシの葉書写に転用していれば、古代のオリエント世界とインドの様々な交流の中で、支持体とともに線刻法がインドに伝来したとの推測が成り立つ。

アラブ人による蠟板尖筆のヤシの葉書写への転用の推測は根拠のないものではない。イスラム以前のアラブの支持体について Mohammed Maraqtan は次のように指摘している。「北アラブでも南アラブでもヤシを支持体とした。葉も幹も使用したようである。書写方法には2種あり、ナイフのような鋭い道具で彫るか、あるいはペンとインクで書いた。前者の場合は生のヤシを使い、後者の場合は乾したヤシを使用した」<sup>39)</sup>。ヤシの「幹」ではなく「葉」の場合には「ナイフのような鋭い道具で彫る」より金属製尖筆で刻字の方が容易である。アラブ人たちが蠟板用尖筆をヤシの葉書写に転用することがなかったらうか。それがインドに伝わったと考えられないか。

もしアラブ人がヤシの葉に尖筆を用いたのでなければ、ヤシの葉支持体と蠟板用尖筆が別々にインドに伝来し2つの組合せがそこで新たに考案された可能性が推測される。

上記のいずれかがインドでの尖筆使用、線刻法の起源ではないか。ヤシの葉写本の起源を考察する研究者は少ないが、その少ない一人の Samia Al Azharia Jahn は「インド人は刻字のための（蠟板の）蠟の当地方での最適代替としてヤシの葉を発見した」<sup>40)</sup> としている。筆者はヤシの葉を蠟板の代替とは考えず、かつ支持体としてのヤシの葉はオリエントに源流があると考えている。その点は異なるが、ヤシの葉尖筆が蠟板用尖筆に起源をもつとする想定は共通する。

### 3 写本学的考察

#### 3.1 2種の書写方法

ヤシの葉に書写する方法はペン書き法と線刻法に2大別できると述べた。その点を次にもう少し詳しく述べたい。

多くのインド写本学の研究が2つの書写方法を紹介し説明している。なかでペン書き法は主に北インドで、線刻法は南インドで使用されたことにも触れている<sup>41)</sup>。しかしどちらの書写方法が先に使用されたか、なぜ2番目の方法が必要とされたかを説明する文献は見当たらない。

ここでも地中海・オリエント世界の書写文化が古代インドに影響を及ぼしたとする仮説を念頭に、考えうる想定を手繰り寄せてみよう。

インドにおける文字使用の初端について再度、考えてみよう。カロッシュティー文字とブラーフミー文字の2種について山崎元一は次のように記している。「(アケメネス朝ペルシャに征服された一筆者) 西北インドには、この時代 (BC 6世紀後半) にペルシャ文化が流入した。その結果、アケメネス朝の公用文字の1つアラム文字に起源するカロッシュティー文字が、この地域で使用されるようになった。」<sup>42)</sup> アラム文字は線刻には適さず、それゆえ支持体には粘土板ではなくパーチメントが使用された、の指摘があり<sup>43)</sup>、この点にも留意しておきたい。アラム文字（そしてそれに由来するカロッシュティー文字）は、刻む文字ではなく書く文字だった。

他方、ブラーフミー文字について山崎は「仏教興起時代のガンジス川中・下流域では、都市が発達し（中略）、貨幣の使用が始まったのも、ブラーフミーの名でよばれる文字の使用が始まったのも、このころである」<sup>44)</sup>と述べる。より詳しく、ブラーフミー文字は西アジア地方から伝えられた文字に由来し、西インドあるいは南インドの一部で最初に用いられたと記す説がある。宮坂宥勝（仏教学者）は「最初、西方との交易に従事したのはアリアン民族ではなく、南インドの原住ドラヴィダ民族であった

だろうと推定されている。もしそうだとすれば、西南または南インド方面に伝えられた輸入文字がウディヤーナを経由して、北インド・ガンジス流域地方のアリアン民族の本拠地に伝播したのではなからうか<sup>45)</sup>と述べている。こうした論述から、文字（西アジア・セム系文字）とともに支持体（ヤシの葉）、書写方法・道具（尖筆）が一体のものとして西南インドあるいは南インドに伝播したと考えられないか。そこにはパルミラヤシもコリハヤシも生息していてヤシの葉支持体の材料に事欠かない。ヤシの葉への書写方法は線刻法かペン書き法、あるいはその両方である。

宮坂の記すように、外国から西南インドあるいは南インドに導入された文字、支持体、書写方法が、北インド・ガンジス河流域へと伝播したとする。BC 5 世紀でいえば、インドは 16 国時代前後、ガンジス河流域が最も政治、文化が栄えた地域であり、例えば釈尊の活動範囲、つまりは仏教の発祥、初期普及もこの地域のマガタ国、コーサラ国などである。同地域には既にカローシュティー文字などの使用と樹皮、布などの支持体及びペン書き法があったのではないか。その地域に新たに西アジア・セム系文字がヤシの葉支持体とともに伝来してきた。そこで文字についてはブラーフミー文字を発展させ、支持体には樹皮などに代わり、簡便に調整でき、支持体として利点をもつヤシの葉を重用することになった。他方、書写方法としては従来のペン書き法を踏襲した。葦や竹を材料とするペンの作製は難しくはないがインクの調製は容易ではない。しかし北・中部インドでは既にそれらは樹皮、布などの支持体用に製造されていた。線刻法を踏襲する必要は必ずしもなかった。

他方、西南インドでは線刻法を採用し、東インド、南インド一带にその方法が伝播した。インクを必要としない利便性のためであろうか。あるいは北・中部インドと異なり、インク精製法が西南インド等では難しかったためであろうか。彦坂周（仏教学者、インド・アジア文化研究所）は南インドでのヤシの葉写本書写方法について研究者の見解として以下を紹介している。「南インドでもある時期、ペン書き法を採用する地域があったが、

インク製法は秘伝とされたためペン書き法は廃れた。」（筆者要約）<sup>46)</sup>

いずれにしるヤシの葉支持体はブラーフミー文字の普及とともにインドの他の地方にも広がり、書写方法として北・中部インドではペン書き法、西南・東・南インドでは線刻法を採用することになった。後、インドを超えて、北方のネパール、南方のスリランカ、東方の東南アジアへとヤシの葉写本文化は広がるが、ネパールではペン書き法、スリランカ・東南アジアでは尖筆法、と2つの書写方法はインド国内にとどまらず、アジア全体で地域区分されることになった。一般にはヤシの葉写本というと尖筆法を思い浮かべる人が多いが、2つの書写方法が明確に別れて地域分布している。

ヤシの葉の書写方法は文字の形態にも影響を与えている。ヤシの葉の構造を調べた阿部登（ヤシ研究者）は「パルミラヤシとコリハヤシの葉の違いが角張ったブラーフミー文字と丸字のドラヴィダ文字の違いを産んだ」<sup>47)</sup>としているが、その違いはヤシの葉の構造の違いではなくヤシの葉への書写方法に由来すると考えるのが妥当であろう。ペン書き法では直線も曲線も書き易いが、葉の表面を尖筆で刻む方法では、直線は繊維に即すると壊しやすく交差する場合は刻みづらい。いきおい直線ではなく曲線を用いて字を象った。それが丸文字形のドラヴィダ文字を生じさせたのではないか。同様の傾向は、線刻法を採用したスリランカと東南アジアの文字にも見られる。スリランカのシンハリ文字、ミャンマーのビルマ（ミャンマー）文字が典型的だが、シャム文字、ラオス（ラオ）文字、カンボジア文字なども曲線主体の丸文字である。これらの地域には南インドあるいはスリランカから仏教とともに文字も伝播しただろうから当然の帰結ともいえるが、また一方、書写方法と文字形の関連をそこにみることもできる。インドの場合だが、原ベンガル文字に起源するベンガル文字は直線の多い文字で、この文字はペン書き法地域で使用されてきた。一方、同じ原ベンガル文字に起源するオリヤー文字は丸文字で、この文字はオリッサなど線刻法地域で使用されてきた。線刻法採用圏と丸文字圏が重なっている。こ

の点に言及する研究者は少なくない<sup>48)</sup>。

### 3.2 2種のヤシの葉

インドでは、コリハヤシ、パルミラヤシ、タラバヤシ、タリエラヤシが支持体として使用されてきたが、先述のとおり特に重用されたのは前2種のコリハヤシとパルミラヤシである。この2種のヤシの葉について、インド写本学に優れた業績を遺したハーンリ（英国）が100年以上も前に詳細な分析を行っている<sup>49)</sup>。それを小西正捷（インド研究者）が自身の見解を含め表に整理しているので、以下、抜粋引用させていただく<sup>50)</sup>。

材質 特徴	コリハヤシ	パルミラヤシ
原産	南インド？	アフリカ？
表面	細い葉脈が走る	あばた状のマークあり
厚さ	概して薄い	概して厚い
幅	3.8～7.5 cm（通常 4.5～6.4 cm）	4.5 cm 以下（通常 2.5～3.8 cm）
長さ	40～100 cm 前後	通常 40 cm 以下
上辺	ほとんどまっすぐ	両端がやや下がることあり
地域と年代	最初期より。中北部と西部では15世紀頃まで。ビハールとスリランカなどでは18世紀中葉まで。	ことに東部において16世紀末より多用され、ほとんど19世紀初頭まで。中北部と西部では用いられない。

形態についていえば、既に記したようにコリハヤシはパルミラヤシに比べ葉が大きく、従ってより大きなシートを用意できる。ハーンリの分析はそれを明白に裏付ける。大きさはヤシ種の識別に重要な尺度を提示している。ただ例えば奈良時代に法隆寺に伝来したヤシの葉写本（現在、東京国立博物館蔵）2葉の幅は約4.8 cm、長さは27.9 cm、上表に従えば長さからはパルミラヤシとなるが、これはコリハヤシと判断されている。葉の大きさは写本を見る場合の目安の1つとのみ考えるべきだろう。

コリハヤシとパルミラヤシの違いが明白となるのは、葉の厚さと柔軟性、

そして縦に走るための葉脈の存否だろう。ハーネリが示すようにパルミラヤシの葉はやや厚いのに対しコリハヤシは薄い。筆者実測で葉の厚さはコリハヤシ 0.3 mm～0.4 mm、パルミラヤシ 0.6～0.7 mm 程度である<sup>51)</sup>。また柔軟性の点ではコリハヤシがはるかに優れる。さらにコリハヤシはヤシの葉写本の上下辺に平行にやや太い葉脈がはっきり見えるが、これはパルミラヤシにない特徴である。

次に2つのヤシの葉使用の歴史的区分について考えてみる。5世紀から19世紀までの残存ヤシの葉写本を調査分析したハーネリは「16世紀末以前に位置するヤシの葉でパルミラヤシを用いたものは2点（1587年と1594年）に過ぎず、それも1点は部分的にパルミラヤシ使用。それ以前は殆どすべてがコリハヤシを用いたものである」「おそらくは南インド原産のコリハヤシが最も古くに用いられた。そしてアフリカ原産と言われるパルミラヤシの使用はインドでは比較的時期の降るものであった」「地域差はあるが1675年頃を期として、支持体としてはパルミラヤシがコリハヤシにとって替わった」<sup>52)</sup>としている。そしてハーネリは、17世紀末の時期にパルミラヤシがコリハヤシにとって替わった理由として紙がインドで普及してきたためと指摘する。

ハーネリの考察は丁寧であり、現代でも彼の見解はインド内外で広く受け入れられている<sup>53)</sup>。しかしコリハヤシとパルミラヤシの支持体としての歴史に関するハーネリの分析には疑問符が付く。

その第1の理由は、パルミラヤシはアフリカ原産でそれゆえインド自生のコリハヤシより活用が遅れたとしている点である。パルミラヤシは確かにアフリカ原産でインド原生ではない。しかしヤシ研究者達は、例えば Kovoov は「東南アジア各地の古い仏教寺院にパルミラヤシが描かれている、パルミラヤシ栽培の技術が東南アジア一帯で共通している、いずれの地のパルミラヤシの呼称もサンスクリット語 tal の影響を多大に受けている。こうした点を考慮すると、歴史の早い時期からインドの影響を受けてパルミラヤシは東南アジアに広まったと考えざるを得ない」（筆者要

約)<sup>54</sup>と記している。また阿部登（先述）は「パルミラヤシはBC 2000年頃にインドに移植されBC 1500年頃にはガンジス河流域に到達した」<sup>55</sup>と説く。

紀元前の早い時期にパルミラヤシがインドやスリランカに移植されていることは、以下の点からも説明できる。ローマの著述家アリアノス（AD 1～2世紀の人）はギリシャ人でマウリヤ宮廷に使節として派遣されたメガステネス（BC 4世紀）の記録に依拠して「食用にするその樹木はインド語で『タラ』と言い、樹上にはちょうどナツメヤシの天辺にみるような、糸玉様の実がつく」<sup>56</sup>と記している。この「タラ」はパルミラヤシを指し、BC 4世紀のインドでパルミラヤシが既に生活に根付いていたことが認められる。パルミラヤシへの言及はインド古典中にも見られる。例えばアジア各地のヤシの葉写本を調査した三保忠夫はG. Ganesan（インド人写本研究者）の「BC 2世紀の‘Paripatal’という作品にはパルミラヤシについての言及がある」<sup>57</sup>とするコメントを紹介している。パルミラヤシは紀元前の早い時期からインドに生息し様々に活用された。

では16世紀以前のパルミラヤシ写本が発見されないのはなぜか。ハーンリの見解に疑問符を付す第2の理由を述べよう。

ハーンリは調査の結果、パルミラヤシは16世紀以降に支持体として活用されるようになったとしている。それはハーンリが残存するヤシの葉写本を分析対象とし、そこから結論を得たからではないだろうか。しかしここで、どういう写本は残存しやすいかと問う必要があるだろう。

ハーンリ自身が同論中で紹介するように、スリランカでは「耐久性があり表面が滑らかなので、書物の書写の目的のためにはコリハヤシが使用されることが多かった。」<sup>58</sup>この指摘は、17世紀のスリランカに長期滞在した英国人ロバート・ノックスの記述と呼応する。ノックスは英国に帰国後『セイロン島誌』を著したが、そのなかでコリハヤシとパルミラヤシの使用について「重要な事件の記録や保管すべき写本などはタリポットヤシ（コリハヤシのこと一筆者）の葉に書くが、手紙などふつうの用事にはタ

ル（パルミラヤシのこと—筆者）と呼ばれる植物の葉を使うことが多い。その葉はタリポットヤシよりも書きやすいのであるが、非常に固くて扱いくく、折りたたむこともできない<sup>59)</sup>と記した。

既に記したようにコリハヤシの葉は柔軟性、耐久性において優れる。それゆえインド、スリランカでは重要であり保存を要する内容にはコリハヤシを用いた。最初から長期に残す意思のもとに書かれたコリハヤシの葉と一時的用途のために使用されたパルミラヤシの葉では、残存に大きな差異が生ずる。行政文書、交易記録等はパルミラヤシに書写されることが多く、それらは用済みとなれば処分されたことだろう。例え直ぐに処分されなくても、宗教、医療、占星術等の文書の場合と違い、傷み劣化しても書き継がれることはなかつただろう。コリハヤシとパルミラヤシの耐久性の差異にも留意せねばならない。とすれば、残存する古いヤシの葉写本の殆どがコリハヤシの葉であるのは理に適うのではないか。インドの気候、パルミラヤシの葉の保存性から推して、16世紀以前のパルミラヤシ写本が少ないのは当然のように思われる。残存写本からのみ支持体ヤシ種の歴史を判断するのは適切ではない。インドでは、パルミラヤシは最初のヤシの葉支持体として、紀元前の早い時期から使用されたと筆者は考える<sup>60)</sup>。

#### 4 ヤシの葉写本文化圏の形成

日本では「ヤシの葉写本＝仏典」の印象が強い。確かにヤシの葉は仏典写本に用いられた権威性を有する支持体である。しかしヤシの葉の用途は仏典に限定されない。筆者がかつて訪問したオリッサ州立博物館（インド）は大量のヤシの葉写本を保存しているが、そこでは写本が天文学、数学、医学、音楽、文学、文法、歴史、占星術、経典に分類排架されていた。ヤシの葉写本の広範囲な使用がそこに伺える。この点でヤシの葉はパーチメントや紙と変わりがない。それは言い換えれば、仏教にとどまらない文書遺産としてのヤシの葉写本の歴史的重要性を示すものである。そこで次

に、このように歴史的、文化的に重要なヤシの葉支持体がインドからアジアの他地域へいつ頃、どのように伝播したかを概括しておきたい。

まずインド亜大陸に南接するスリランカであるが、ヤシの葉写本のそこへの伝播は早い。スリランカの仏教伝来はBC 3世紀とされており、そして既述のとおり、BC 1世紀にスリランカで結集された仏典が書写され、その支持体はヤシの葉と見なされている。スリランカは現在も豊富なヤシの葉写本が保存されていることで知られる。

目をインド北方に転ずると、ヒマラヤ山麓のネパールにもヤシの葉支持体が普及した。ただネパールでは中国文明の影響を受けて早くに製紙技術が導入され、かつ一部を除けば支持体ヤシは生息しない。その点は次に述べる東南アジアと事情が異なるが、しかしインド宗教の強い影響を受け、インド系文字を採用し、ヤシの葉支持体を重視した。

ネパールに製紙が興るのは11世紀頃、普及するのは12世紀頃とされる<sup>61)</sup>が、それ以降も長くインドから輸入のヤシの葉を紙とともに用いた<sup>62)</sup>。その点を多数の古写本を所蔵するネパール国立公文書館のコレクションで見ると、そこには9世紀から17世紀までのヤシの葉写本が保存されている<sup>63)</sup>。現在、ネパールには国立公文書館、アーシャ・サファー・クティ（民間アーカイブズ）ほかに多くのヤシの葉写本が保存されている。

一方、東南アジアは、インドシナ半島、インドネシア（インドの島）の名が象徴的に表すように、紀元前の時代からインド文明の影響を深く受けてきた地域である。そこではインドからの人々の移住、植民、交易、文化移植などが大きな意義と位置付けを有する。著名な東南アジア研究者ジョルジュ・セデスはこの歴史的現象を東南アジアの「インド化」と名付けている<sup>64)</sup>。支持体としてのヤシの葉もインド化の一環として移植されたはずである。各地域への伝播時期を詳細に特定するのは難しいが、以下、概観を得るように努めてみよう。

本テーマの関連では、インド化のなかでも宗教とりわけ仏教の伝播と各地域での文字の誕生が重要である。仏教の布教あるいは伝播には經典が不

可欠であり、経典は文字と支持体を必要とする。

東南アジア地域で使用されてきた文字は、中国の影響を受けた北部ベトナムを除くとすべての文字がインド系文字である。ここにインド文化の圧倒的影響を見てとることができる。インド系文字が受容され、各地で独自の文字を誕生させた。一方、東南アジアにも支持体となるヤシが生育する。他の何よりもヤシの葉が、文字そして仏典などを書写する重要な支持体として認められたはずである。

ミャンマー（ビルマ）への仏教伝播は早い。チャクラヴァルティ（インド古代史家）は「南ビルマにはモン族の古い王国があり、（中略）西紀1世紀までには小乗仏教はその地方に確立されていた」「北ビルマでは西紀3世紀に大乘仏教が伝えられた」<sup>65)</sup>としている。またウ・トーカウン（図書館学者、ミャンマー）は、ミャンマーで発見されたポーティ様式のパーリ語金板（gold plates）写本は1世紀のもものと推定され、それは既にその頃ヤシの葉写本が存在したことを示すと記している<sup>66)</sup>。歴史の極めて早い時期からヤシの葉写本がミャンマーに流通していたことがわかる。その後の歴史からすれば11世紀初め、スリランカから下ビルマのモン族国家群によって導入された上座仏教が重要で、それによってサンスクリット文化に替わりパーリ文化が隆盛となる。モン文字、ミャンマー（ビルマ）文字の成立、おそらくそして線刻法の普及は11世紀以降の歴史と関わっている。

東南アジアの特に大陸部は歴史的に見れば相互の繋がりが顕著である。タイ民族の場合もミャンマーからの影響を受け、最初の千年紀から仏教、文字、ヤシの葉を受容している。ただ、スコタイ王国の建設、チェンマイ王国の成立は13世紀、上座仏教を国教とするのは14世紀である。仏教の普及とともに文字の使用、ヤシの葉写本が大いに広まるのは、それ以降と考えられる。

カンボジアについては紀元前からの仏教伝来の記録があるが、本格的な大乘仏教の伝来は6世紀以降である。仏教遺跡として知られるアンコール

トムの建設は9世紀、アンコールワットの建設は12世紀である。上座仏教の受容はタイを経由しての13世紀後半とされる<sup>67)</sup>。その頃（13世紀末）、カンボジアを訪れた中国人使節・周達観が「となえるところの經典は甚だ多い。みな貝葉を用いてかさねてつくり」「筆墨を用いない」<sup>68)</sup>と書き残している。周達観は一方で「通常の文字及び役所の文書は、みなおおなれしかの皮などの物を黒く染め」<sup>69)</sup>それに白亜の類の素材で書く、としている。従来の獣皮に顔料で「書く」文化の上に、ヤシの葉に「刻む」新しい書写文化が仏教とともに伝来し普及した様子を知ることができる。ラオスへの仏教伝来はカンボジア経由で、14世紀後半に上座仏教を受容した。

これら東南アジア大陸部では仏教の受容とともにヤシの葉支持体が使用され始めたと考えられる。タイでもラオスでも現在、数多くの寺院、図書館、アーカイブズ等で15～16世紀以来の仏教典はじめ歴史、法律、慣習・風俗、星占術、伝統医療法、文学等のヤシの葉写本が保存されている。ヤシの葉支持体は近代以前の歴史文書の主軸をなす<sup>70)</sup>。

島嶼部のインドネシアについては、世界文化遺産に登録されているジャワ島のボロブドール遺跡やプランバナナ寺院がインドの影響を受け、かつては仏教国、ヒンズー教国であったことを偲ばせる。バリが現在もヒンズー教の島であることは良く知られる。時代的にはスマトラにインド人によるシュリー＝ヴィジャヤ王国が成立するのが7世紀、そこで大乘仏教受容の記録が見られる。ジャワにシュレンドラ王国が興るのが8世紀中頃で、そこでは大乘仏教が行われている。またボロブドール建立が8世紀後半から9世紀中頃である。おおよそこのような時代にヤシの葉写本が仏典として請来し、次いで同地でヤシの葉が支持体として調製されるようになったと推測する。

次にこれらの地域の文字について簡単に記しておく。ブラーフミー文字系のグプタ文字から生まれた文字にパーリ文字があるが、シンハリ文字（スリランカ）、ミャンマー（ビルマ）文字、シャム文字（古タイ文字）、

カヴィ文字はパーリ文字から派生している。カヴィ文字は9世紀から15世紀にかけてジャワ島に広まったとされている。

以上、東南アジア諸地域へのヤシの葉写本文化の伝播は、第一千年紀の中頃から第2千年紀の初期と要約して良いであろう。そこでは宗教（特に仏教）、サンスクリット語／パーリ語、サンスクリット文字／パーリ文字が組み合わせで伝播し、それが各地で変容しながら定着した。文字書写の道具であるヤシの葉支持体及び線刻法がそれとともに普及した。

東北アジアの一部にもヤシの葉写本文化が見られる。ヒマラヤ山麓のチベットにも特に仏教研究上、重要なヤシの葉写本が多数保存されている。チベットは中国文明の影響を受け7世紀に紙と墨を導入し、かつそこには支持体ヤシは生息しない。しかしインド仏教に帰依し、文字はインド系文字、そしてヤシの葉支持体を重視した。チベットで書記された支持体は紙が中心だが、ヤシの葉支持体は写本として一即ち既に書記されたものとして一インドなどから輸入されることが多かったと推測する。その点は、チベット占領時代敦煌（770～848）の発掘写本に、ヤシの葉ペン書きのサンスクリット語仏典（8世紀、北インドから請来との想定）が見られること、同時に紙にペン書きのチベット語、サンスクリット語仏典が多く見られるがそれがポーティ様式を踏襲しているなどから推測できる<sup>71)</sup>。ただ、チベット文字記載ヤシの葉写本も存する事実に留意が必要である。

インドで紀元前に誕生したヤシの葉写本文化は、インド国内のみならず宗教、文字の伝播に伴って周辺地域に広まった。そして南アジアのインド（現在のパキスタン、バングラデシュを含む）、ネパール、スリランカ、東南アジアのミャンマー、カンボジア、タイ、ラオス、マレーシア、シンガポール、ベトナム（南部）、インドネシア、そして東北アジアに位置する中国ウイグル自治区、チベット、がヤシの葉写本文化圏を構成するに至った<sup>72)</sup>。さらにアフガニスタンなどで大量のヤシの葉写本が発見されており、中央アジアにまで範囲が広がっている。このように概観すると、全体として東アジア、東北アジア（の一部）を除くほぼアジア全域にヤシの葉

写本文化圏が広がっていることがわかる。

支持体ヤシの葉に非常に多くの重要な書物・文書が書写されてきたが、この支持体は世界的にみて、時間軸では紙よりも長く使用され、空間軸ではパーチメントに匹敵する広がりをもつ。時間軸、空間軸そして残された写本の質量によって、ヤシの葉写本は極めて豊かな文書遺産を形成している。世界文化史上、貴重な歴史遺産であることが認められよう。

## 5 写本制作の終焉

ヤシの葉写本の始原と普及、地理的広がりを中心に述べてきたが、最後にその後の歴史、特にどのようにヤシの葉写本時代が終焉を迎えるに至ったかに触れておきたい。

終焉と言ったが、実はヤシの葉写本は今でも南アジア、東南アジアの一部で制作されている。まだ完全に「終焉した」わけではない。とはいえ制作量は小規模となり、経典、護符、宗教画等の用途を除いては使用されなくなっている。一般的な現用支持体としては、その役割は終了していると考えべきだろう。

ヤシの葉写本が終焉を迎えるに至った理由は、先述のハーネリや小西正捷が示すようにある意味では紙・製紙技術の伝播・普及である。

インドの場合を例にとりそれを見てみる。インドの製紙技術導入の歴史を追跡するのは容易ではないが、以下、主として小西正捷の考察<sup>73)</sup>に依拠して述べてみよう。

おそらくインド、特に北部インドの人たちは早くから紙を目にして知っていたに違いない。製紙技術はシルクロードを西進し、7世紀にはチベット、8世紀にはサマルカンドで製紙工場が建設されている。一千年紀に既に、中国の紙、チベットやブータンの紙、サマルカンドやバグダートの紙などを目にし、使用することがあったのではないか。しかしインドではそれを製紙技術の導入へと繋げることはしなかった。一般には、ボロ布から

製造する紙を不浄とし、サイズ剤（にじみ止め）に膠（動物の皮・骨から製造する）を使うことを忌み嫌ったことが製紙技術導入の遅れの原因とされている<sup>74</sup>）。しかし支持体としてヤシの葉で用が足りたことが最大の理由であろう。往時の支持体ニーズに対しては、質量ともにそれで十分、充足できた。また他方、書写文化には一特に宗教性、儀礼性、権威性を帯びる場合は顕著だが一往々にして伝統重視の保守的傾向が見られる。インドの場合も多分にそれが該当するのだろう。

インドで製紙工場が設置され、紙が普及し始めるのは、12世紀以降、段階的にイスラム教徒が勢力を伸張させるようになってからである。16世紀にはイスラム教徒のムガル王朝が興り、イスラム文化が一層インドに浸透することになる。そしてイスラム文化は8世紀には早くも支持体をパーチメント等から紙に切り替えている。そうした政治社会的・文化的動向のなかでインドに紙が定着していく。

ハーナリは1675年を画期にコリハヤシがパルミラヤシへと交替するとした<sup>75</sup>）。彼の示すとおり、紙の普及がそれを促した。即ち、耐久性が必要な重要なものには紙を使い、それ以外の場合（手紙や書付、簡単な記録など）にはパルミラヤシの葉を使うようになった。この点は地方により事情は異なるが、粗く言えばそんな使い分けがされるようになっただろう。しかしハーナリの説明には幾らか補足が必要である。なぜならハーナリが示すようにコリハヤシがパルミラヤシに交替したのではないからだ。「コリハヤシ+パルミラヤシ」使用が17世紀を期に「紙+パルミラヤシ」使用へと変化した。ヤシの葉が紙に、ではなくコリハヤシが紙にとって替わられたのである。

インドでは、ヤシの葉と紙は使い分けされながら、支持体として双方が長期に亘り共存した。16世紀以降、製紙工場がインド各地に広がっても、ヤシの葉は支持体として使用され続けた。つまり紙はヤシの葉にとって替わりはしなかった。事情は東南アジアでも概略、同様である。

支持体としてヤシの葉が制作されなくなるのは、インドでは紙導入のず

つと後、19世紀末～20世紀初頭頃である。それを促したのは実は紙そのものではない。世界史規模で起こった大きな政治的・社会的変動―産業革命、植民地事情、識字層の増大などが基底にあるが、より直接的には19世紀にインドそして東南アジア諸国に印刷技術が導入されたためである。

印刷技術が、2000年以上の長きに亘り使用され続けたヤシの葉を支持体の舞台から去らせることになった。写本時代から刊本（印刷本）時代への移行が、ヤシの葉写本制作に終焉をもたらしたのである。比喩的に言えば、ヤシの葉は「紙」にではなく「印刷機」にとって替わられた。

この点は製紙技術の伝播後、伝統的支持体であるパピルス及びパーチメントが駆逐され、ついにはグーテンベルクの活版印刷術に辿りつくイスラム社会、ヨーロッパ社会と異なる点である。インド及び東南アジアなどのヤシの葉写本文化圏ではそのような変化は起きず、伝統的支持体と紙が共存した。これは文書遺産としてヤシの葉写本を理解するうえで十分の留意が必要なポイントである。

## おわりに

支持体ヤシの葉は、時間軸では紙よりも長く使用され、空間軸ではパーチメントに匹敵する広がりをもつ。少なくとも近代以前の支持体としては、紙・パーチメントと同等の世界性、普遍性を有する。

にもかかわらず一般にはそのように認められてはいない。例えば日本の国語辞典類はヤシの葉支持体（貝多羅）を「古代のインドで、紙の代わりに、ヤシの葉に尖筆で、仏典等を著した書写材料」としているのが通常だ。小稿で見てきたように、それは時代的、地理的にみて誤りであり、かつその説明にはヤシの葉をローカルで、原始的、特殊な支持体とする偏見が伺える。この点、関係者の再考を願いたいところだが、全体的としてヤシの葉支持体の理解が進むことが重要である。その歴史的・文化的意義、ある

いは世界的・普遍的価値について、一般の認識が根本的に改まる必要があるように思われる。

このように普遍性を持つヤシの葉支持体がアジアで豊かな文書遺産を形成している。ヤシの葉写本遺産は世界文化史的に貴重だが、何よりもそれを産み出してきた各地域の人々の掛け替えのない歴史遺産・文化資源である。それは国民・人々のアイデンティティーを育て、未来を創る基盤でもある。

貴重なこれらのヤシの葉写本がしかし、時代の変遷、戦争・紛争、災害、気象条件、素材の脆弱性、人びとの無関心等によって多くが消失・散逸し、保存が困難となっている。こうした事情は文書遺産全体に共通するが、ヤシの葉写本の場合、書写継がれる伝承方式の基盤である技術が継承されていないので一層、難しい局面にある。

そうした状況のなか、様々な取組みが進行中である。インド・マドラスのアジア文化研究所はタミル・ヤシの葉写本コレクションの保存・デジタル化事業に取り組んできたが、同コレクションが1997年にはユネスコ「世界の記憶」に登録された<sup>76)</sup>。一方、文書遺産の重要性を理解したインド政府は、2003年にNational Mission for Manuscriptsを設立して文書保存に取り組んでいる。その活動の一環として2005年には写本保存セミナーを開催したが、セミナーの趣旨はヤシの葉写本制作の固有の方法、保存技術の継承と検証を重点とするものであった<sup>77)</sup>。

東南アジア諸国でもヤシの葉写本など文書遺産の重要性は認識している。1993年に続き2000年に、図書館・アーカイブズの資料保存（当然、ヤシの葉写本保存も含まれる）の諸活動促進のための大規模な会合<sup>78)</sup>を開催しているのがその1つの現れである。

アジア地域のヤシの葉写本保存ニーズに呼応する諸外国からの支援事業の意義も大きい。日本からも研究者、研究機関、関係団体が主体となり、トヨタ財団、日本財団、国際交流基金等からの助成も得て、アジア諸国のヤシの葉写本保存・マイクロ化計画が長きに亘って実施されてきている。

近年の例では東京外国語大学の21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」によるヤシの葉文書デジタル化協力事業、保存修復家達によるネパール巻型ヤシの葉写本修復・デジタル化プロジェクト等がある。しかしヤシの葉写本文化圏全体として見れば、保存の取組みは著しく不十分であり、「時間との闘い（Race against time）」において頗る劣勢に立たされているのが現況である。

最初に記したとおり、筆者は困難な状況にある文書遺産の保存に関心をもつ者である。本稿では主として歴史的な視点でヤシの葉写本全体像の素描を試みたが、次の機会にはヤシの葉・紙などを支持体とする文書遺産保存の課題をまとめたいと考えている。

#### 注

- 1) 厳密に言えば「書く」「刻む」等は区別すべきだが、特に必要でない限り本稿では「書写」と一括する。
- 2) 関連拙稿に以下がある。「文化協力のススメーアジアの蔵書を保存するために」『アジアをつなぐネットワークー保存協力のこれから』日本図書館協会、1999, p. 25-43. 「地域研究と資料保存ー保存管理者の視点」『史資料ハブ 地域文化研究』no. 9, 2007, p. 11-22.
- 3) 阿部登『ヤシの葉に書いた文字の話』阿部博編集、1999, p. 58-59.
- 4) 小稿のインド地理区分は、概ねゴードン・ジョンソン（小谷汪之ほか訳）『図説 世界文化地理大百科 インド』（朝倉書店、2001）に示される諸文化圏を念頭においている。
- 5) パルミラヤシの世界分布図が以下に示される。Kovoor, A. The Palmyrah Palm: Potential and Perspective. FAO, 1983, p. 10. 及び阿部登（注3）p. 28, p. 35.
- 6) 三保忠夫「スリランカにおける貝葉文書・典籍の作成方法について」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』vol. 28, 1994, p. 77.
- 7) インドネシア、マレーシアでは支持体をロンタル（lontar）と称すが、そのヤシ種の理解が識者により、a) パルミラヤシ、b) タラバヤシ、c) ニッパ、と異なる。この点を筆者は以下のように理解している。

lontar は「ron（葉）+tar」の合成語でパルミラヤシを指す tar（ヒンディ語）あるいは tal（サンスクリット語）に由来し、インドネシア、マレーシアに分布

するバルミラヤシである。この場合は特定種を示すので英語的に記せば頭大文字の Lontar である。一方、これらの地域ではバルミラヤシのほかタラバヤシ、ニッパ、ココナツヤシ等の葉も支持体として使用された。それらの総称、即ち支持体ヤシの葉の意では頭小文字の lontar である。

支持体ヤシ種の同定は、識者、植物学者の見解に相違があり難しいが、それについて以下に説明がある。三保忠夫、三保サト子「大唐西域記にみえる『多羅樹林』について」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』vol. 35, 2001, p. 20-25.

- 8) 小林良生「貝多羅葉の原料植物とその造り方」『百万塔』no. 106, 2000, p. 36-38.
- 9) Kumar et al. Illuminations. The Writing Traditions of Indonesia. The Lontar Foundation, 1996, p. 103.
- 10) 同上, p. 103.
- 11) ヤシの葉調整方法については以下等を参照のこと。Jeyaraji, V. "Traditional practices and palm-leaf manuscripts in Tamil Nadu". Indigenous Methods and Manuscripts Preservation. Sah, Anupam ed. National Mission for Manuscripts, 2006, p. 144.
- 12) Shaw, Graham. "South Asia". A Companion to the History of the Book. Eliot, Simon et al eds. Wiley-Blackwell, 2007, p. 127.
- 13) 小林（注8、p. 54）は、ヤシの葉に印刷するタイでは葉の油分を除去するため炭火で炙ると紹介している。
- 14) ネパールのヤシ種については以下を参照した。Takagi, Naoko et al. "Conservation and digitization of rolled palm leaf manuscripts in Nepal". <http://www.asianart.com/article/tamsuks/index.html>. また書写方法について上記記事執筆者の一人、高木直子氏のご教示を得た。
- 15) Diskalkar, D. B. Materials Used for Indian Epigraphical Records. Bhandarkara Oriental Research Institute, 1979, p. 70.
- 16) Buhler, Georg. Indian Paleography from about B. C 350 to A. D. 1300. Today & Tomorrow's Printers & Publishers, 1973. (1st published in 1896), p. 15.
- 17) 山崎元一『古代インドの文明と社会（世界の歴史③）』中央公論社、1997, p. 333-334.
- 18) 参考文献は世界の文字研究会編『世界の文字の図典（普及版）』吉川弘文館、2009, p. 224-225、アルベルティーン・ガウアー（矢島文夫ほか訳）『文字の歴史』原書房、p. 143-152 及びステイヴン・ロジャー・フィッシャー『文字の歴史』研究社、2005, p. 135-155.

- 19) R. S. シャルマ（山崎利男ほか訳）『古代インドの歴史』山川出版社、1985, p. 145.
- 20) 水野博行『経典はいかに伝わったか』佼成出版社、2004, p. 117-118.
- 21) 以下の2点が同称の理解を示す。但しその根拠は記されない。Hikosaka, Shu and Samuel, G. John, eds. *A Descriptive Catalogue of Palm-leaf Manuscripts in Tamil*. 1990, p. ix. 及び Pinn, Fred. "The preparation of palm-leaf documents". *Journal of Indian States History*. vol. 2, no. 2, 2001. <http://www.princelystates.com/ArchivedFeatures/fa-03-05.shtml>（参照 2010.9.1）
- 22) クルティウス・ルルス（谷栄一郎ほか訳）『アレクサンドロス大王伝』京都大学学術出版会、2003, p. 348.
- 23) ストラボン（飯尾都人訳）『ギリシャ・ローマ世界地誌』竜溪書舎、1994, p. 421.
- 24) Pliny. *Natural History*. Harvard University Press, 1945, vol. 4, p. 139-141.
- 25) プリニウス（大槻真一郎責任編集、岸本良彦ほか訳）『プリニウス博物誌 植物篇』八坂書房、1994, p. 75.
- 26) 蠟板も書板の一種だが、本稿ではペン書き書板と線刻蠟板を区別することに意味があるので別記した。
- 27) プリニウス（注 25）p. 663.
- 28) 佐藤次高『イスラームの生活と技術』山川出版社、1999, p. 18.
- 29) 小杉泰『クルアーン』岩波書店、2009, p. 38.
- 30) "Alchemy in Islamic time". <http://www.leity.com/alchemy/islam08.html>（参照 2010.9.1）
- 31) インドにおける書板の使用については Diskalkar, D. B.（注 15）が詳しい。
- 32) Jahn, Samia Al Azharia. "Comparative studies on different concepts about the origin of writing on palm leaf". *Asiatische Studien*. vol. 60, no. 4, 2006, p. 925.
- 33) Kumar, D. Udaya et al. "Traditional writing system in Southern India - Palm leaf manuscripts". [www.idc.litb.ac.in/resources/dt-july-2009/Palm.pdf](http://www.idc.litb.ac.in/resources/dt-july-2009/Palm.pdf)（参照 2010.9.1）及び Agrawal, O. P. *Conservation of Manuscripts and Painting of South-east Asia*. Butterworths, 1984, p. 32. より転載。
- 34) 三保忠夫「貝葉文書・典籍（Palm Leaf Manuscripts）について－書写素材史研究序説－」『島根大学教育学部紀要』vol. 27, no. 2, 1994, p. 4. なお三保は続く次の論文で尖筆がヨーロッパの影響を受けた可能性を指摘している。「スリランカにおける貝葉文書・典籍（Palm Leaf Manuscripts）の作成方法について」

- 『島根大学教育学部紀要』 vol. 28, 1994, p. 77.
- 35) オリッサの尖筆写真が以下に掲載されている。ショバ・ラニ・ダシュ「インド・オリッサ州の貝葉写本の特徴について」『仏教学セミナー』 no. 85, 2007, p. 65.
- 36) “Splendors of the bronze age”. National Geographic. no. 17286, 1987, p. 730.
- 37) Sirat, Colette. *Writing as Handwork: A History of Handwriting in Mediterranean and Western Culture*. Brepols, 2006, p. 180. 詳細な報告として以下がある。Fincke, Jeanette C., “The Babylonian texts of Nineveh”, *Archiv fur Orientforschung*. no. 50, 2003/2004, p. 111-149.
- 38) Kenyon, Frederic G. *Books and Readers in Ancient Greece and Rome*. The Clarendon Press, 1932. p. 81 より部分転載。
- 39) Maraqtan, Mohammed. “Writing materials in pre-Islamic Arabia”. *Journal of Semitic Studies*. 1998, vol. 43, p. 292.
- 40) Jahn (注 32) p. 922.
- 41) Sircar, D.C. *Indian Epigraphy*. 1965, p. 61. 及び小西正捷「インドにおける紙本以前の文書素材」『中央大学アジア史研究』 no. 6, 1982, p. 5 など。
- 42) 山崎 (注 17) p. 147.
- 43) フォーブス (矢島文雄監訳) 『古代の技術史 下・1』 朝倉書店、2003, p. 336-337.
- 44) 山崎 (注 17) p. 98.
- 45) 宮坂宥勝「梵語の成立と歴史」『梵字貴重資料集成 解説編』 東京美術、1980, p. 5.
- 46) 彦坂周「全インド貝葉及び古文書文献のセミナーを開催して」『印度学仏教学研究』 vol. 44, no1, 1995, p. 53.
- 47) 阿部 (注 3) p. 56-57.
- 48) ガウアー (注 18) p. 54-55.
- 49) Hoernle, A. F. R. “An Epigraphical note on palm-leaf, paper and birch-bark”. *Journal of Asiatic Society of Bengal*. vol. 69, 1900, p. 93-134.
- 50) 小西正捷「インド中・近世における抄紙技術の導入と確立」『歴史と地理』 no. 492, 1996, p. 3.
- 51) ヤシの葉の厚さ実測例に以下がある。但し、生（未調製）の葉で、かつ米国フロリダ州生息ヤシから採取の葉が対象で参考にし難い。Freeman, Rachel. “Turning over old leaves: Palm leaves used in South Asian manuscripts”. *The Book and Paper Group Annual*, vol. 24, 2005, p. 100-101.
- 52) Hoernle (注 49) p. 122.

- 53) 例えば B.S.Kasavan, ed., *The Book in India*. 2nd ed. National Book Trust, 1992, p. 9-11. Losty, Jeremiah P. *The Art of the Book in India*. British Library, 1982. p. 6-7, 及び Shaw (注 12) p. 127.
- 54) Kovoov (注 5) p. 3.
- 55) 阿部 (注 3) p. 23.
- 56) アッリアノス (大牟田章訳) 『アレクサンドロス大王東征記 付インド誌』岩波書店、2001, 下巻 p. 244.
- 57) 三保忠夫、三保サト子 (注 7) p. 34-35.
- 58) Hoernle (注 49) p. 105-106.
- 59) ロバート・ノックス (浜屋悦次訳) 『セイロン島誌』平凡社、1994, p. 245-246. (原著 1681 年初刊) なお以下の三保忠夫論文にその紹介と解説がある。「17 世紀におけるスリランカの書写生活について—ロバート・ノックス著『セイロン島誌』—」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』vol. 30, 1996, p. 63-82.
- 60) 同様の意見が以下に示される。三保サト子、三保忠夫「インドネシア・バリ島における Palm Leaf Manuscripts について」『島根女子短期大学紀要』vol. 37, 1999, p. 82.
- 61) 辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典 (新訂増補)』平凡社、2002, p. 159.
- 62) ネパールにおけるヤシの葉の供給事情は (注 14) 高木直子氏のご教示による。
- 63) 小川千代子「ネパールの文書保存法 (訳)」『北の丸』no23, 1991, p. 132.
- 64) セデス、G. (山本智教訳) 『東南アジア文化史』大蔵出版、1989. 特に第 2 章 p. 39-66.
- 65) K. C. チャクラヴァルティ (橋本芳契ほか訳) 『古代インドの文化と文明』東方出版、1982, p. 272.
- 66) U Thaw Kaung. “Myanmar traditional manuscripts and their preservation and conservation”. *Selected Writings of U Thaw Kaung*. Myanmar Historical Commission, 2004, p. 257.
- 67) カンボジア、ラオス、タイについては奥平龍二「上座仏教国家」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社、1994, p. 90-108. も参考にした。
- 68) 周達観 (和田久徳訳) 『真蠟風土記 アンコール期のカンボジア』平凡社、1989, p. 26.
- 69) 同上、p. 41-42.
- 70) 主として以下を参考にした。Hundius, Harald. “Preservation of Lao Manuscripts Programme”. *Proceeding of the International Meeting on Microform Preservation and Conservation Practices in Southeast Asia*. Abhakorn, Rujaya et al. eds. Chiang Mai University, 2000, p. 313-317. 及び Abhakorn, Rujaya. “Issues and future of preservation activities and

- collaboration in Southeast Asia”. Pre-Conference of WLIC 2000. <http://www.ndl.go.jp/en/iflapac/preconference/pdf/RujayaAbhakorn.pdf>（参照 2010.9.1）
- 71) 英国図書館所蔵敦煌写本 Prajnapramitasutra（資料番号：IOL San 1492）が北インド請来ヤシの葉写本の一例である。チベット・ヤシの葉写本の概要については以下が参考になる。Tsewang Gyurme. “Protecting the Sanskrit palm-leaf manuscripts in the Tibetan Autonomous Region- A Summary”. *Sanskrit Manuscripts in China*. China Tibetology Publishing House, 2009, p. 303-305.
- 72) フィリピンもインド化の影響を受けている。BC 3 世紀にブラーフミー文字が伝わりココヤシの葉、樹皮、竹等に線刻されたらしい。ただ長期に保存されているものがなく竹以外の支持体の確認が難しい。参考文献：Jack, Katherine. “Written into history”. *Geographical*. vol. 81, no. 4, 2009, p. 46-48.
- 73) 主として以下に基づく。小西正捷「インドの古文書紙と製紙技術の成立」『百万塔』no. 52, 1981, p. 29-45. 同「インド伝統的製紙業の興亡—ムガル朝の確立より 19 世紀末まで—」『史苑』vol. 4, no. 1, 1985, p. (1)-(50)
- 74) 小西正捷「インド中・近世における抄紙技術の導入と確立」『歴史と地理』no. 492, 1966, p. 2. インドが製紙技術の導入に消極的であった理由についてはより丁寧な議論が必要と思われる。例えばサイズ（滲み止め）に膠（動物性）を使用する点がその理由に挙げられるが、これは西洋の技法である。イスラム・ペーパーは主として小麦でんぷんをサイズ剤とした。
- 75) Hoernle（注 49）p. 104-105.
- 76) Tamil Medical Manuscripts. インド政府は別に Saiva Manuscripts in Pondicherry（ヤシの葉写本コレクション）をユネスコに「世界の記憶」として登録申請中である。
- 77) Sah, ed.（注 11）が同会議の記録である。
- 78) Abhakorn, et al. eds.（注 70）が同会議の記録である。

（人文科学研究科アーカイブズ学専攻 非常勤講師）